

水の哲学

莊子

「人は流水に鑑^{かんが}みるなくして 止水に鑑^{かんが}みる」

莊子は紀元前の中国・戦国時代の宋国に生まれ、老子と共に道教の始祖として崇められた。老子の説く「無為自然」の道の継承者として二人の思想は一括して「老莊思想」とも呼ばれている。

しかし書物としての『老子』と『莊子』を比べてみると、おもに倫理的な政治学を唱えた老子に対して莊子は遥かに夢想家的な色彩が濃い。その自由奔放な想像力は多くの文学者などに影響を与え、日本で初めてノーベル賞を受賞した物理学者の湯川秀樹も『莊子』第十七篇「秋水」の最後の一節にある「知魚楽」という言葉を好んで色紙に書いていたという。

雑念なく澄みきった心境

「人は流水に鑑みるなくして止水に鑑みる」は『莊子』の徳充符篇にある言葉。

正確には――

仲尼曰、
人莫鑑於流水、而鑑於止水。
唯止能止衆止。

仲尼曰く、
人は流水に鑑みるなくして、止水に鑑みる。
ただ止のみ能く衆止をとどむ。

仲尼とは孔子のこと。固有名詞がまったく出てこない『老子』と違って『莊子』には歴史上の人物が数多く登場する。とくに多いのは孔子とその弟子たちで孔子はエピソードに応じて批判の対象になったり、尊敬の対象になったりする。いずれにせよ莊子が孔子から少なからず影響を受けていたことはまちがいない。

止水は静止した水のことで流水と対置されている。ここから止水は雑念のない澄みきった心境と一般的に解釈されている。

静止した水は流水と違ってあらゆるものごとをよく映し出し、虚心に受け止めることができる。それは莊子が理想とする「坐忘」の象徴だ。

類似した言葉として虚心坦懐、無念無想、無私



無欲などに置き換えてもいい。晩年の夏目漱石が到達した「則天去私」もおなじような静謐な心境とっていいだろう。

勝海舟の『氷川清和』などで印象的に使われている「明鏡止水」という言葉も一般的に『莊子』がルーツとされている。しかし『三国蜀志』にも「水鏡私無し」という言葉があるように、むしろこれは中国の故事がいつのまにか融合して言い伝えられるようになったという気がする。

胡蝶の夢の意味するもの

莊子の夢想家的な資質を示す説話として司馬遼太郎の小説のタイトルにもなった「胡蝶の夢」が有名だ。

あるうららかな春の日、莊子は自分が蝶になって空を飛び、花から花へと楽しく遊ぶ夢を見る。ふと眼が醒めてもとの自分に戻ったとき、莊子はこんなことを考える。

果たして自分が夢を見て蝶になったのか、それとも蝶が夢を見て自分になったのか、と。

これは『莊子』齊物論篇の象徴的なエピソードだ。ここではいわゆる主観と客観の哲学的な問題が問われている。わかりやすくいうと「胡蝶の夢」の場合の主観は莊子、客観は蝶ということになる。



より普遍的にいうと莊子は人間、蝶は自然の象徴と読み解くことができる。通常なら主観と客観は明確に区別されているけれど、あえて莊子はそんなにはっきりと区別がつけられるのかと問題を投げかけているわけだ。

デカルト以降の西洋の近代合理主義哲学では主観＝人間と客観＝自然は相対立する別のものとして認識されてきた。すなわち人間にとって自然とは有用な物的資源として改造する客観の対象だ。

しかし「胡蝶の夢」では主観＝人間と客観＝自然の明確な区別は存在しない。いわば主客の合一が唱えられている。自然と人間を一体のものとしてとらえる東洋の世界観は日本固有の哲学の創始者といわれる西田幾多郎が『善の研究』で論じた「純粹經驗」にも受け継がれているとっていいだろう。

人間は大地から生まれて最後はふたたび大地に還る。西欧近代文明が疲弊し、地球規模で環境問題がクローズアップされ、自然と人間の関係をあらためて問いなおさざるをえないとき、莊子の哲学は時空を超えて刺激的なインスピレーションを与えてくれるかもしれない。（高倉）

参考文献

- 『莊子』 岩波文庫
- 『莊子』 中公文庫
- 『老子・莊子』 講談社学術文庫
- 『莊子物語』 講談社学術文庫
- 『莊子—中国の思想』 徳間文庫